

15【街の散策からの気づき発見】

秋葉神社再建計画と春日部駅西口・秋葉神社の夫婦松

会員 K.T.

10月、秋葉神社が整地された。春日部駅鉄道高架事業の関係で、敷地を小さくし建て直しされる、とのことだ。

須賀芳郎 著『春日部の神社』の秋葉神社の章をみると、「ご祭神は火産靈命(ほむすびのみこと)

鎮座年月日は不詳。古来よりこの地に鎮座し、火防の神として広く崇敬されている。(中略)この神社は、元は春日部駅西口左手の銀杏の木がある場所に鎮座していたが、西口区画整理事業によって現在地(中央一丁目)に移転した。(後略)」と、ある。

前回の移転は西口の開発、今回は駅の高架事業の関係で敷地の一部が道路拡張等再開発事業に使用されるようだ。元々あった場所は春日部駅西口の「秋葉神社の夫婦松(めおとまつ)」のあたりにあった。銀杏と松が根本で一緒にみえ、少し上から銀杏と松が分岐し別々に育成してみえる珍しい樹木となっている。この樹木は珍しいことから春日部市の指定文化財になっている。記碑によると、「秋葉神社の夫婦松

天然記念物 昭和63年(1988)7月25日 市指定

秋葉信仰は、江戸時代の中頃、三河(現在の愛知県)の秋葉三尺坊という修験者が呪術により火災の厄を払ったことに始まり、その後、全国的な流行となったものといわれ、秋葉社は火防の神として現在でも多くの信仰を集めています。

この秋葉神社は、江戸時代に粕壁宿の名主多田次郎兵衛が個人的に祠を建てて祀ったものといわれていますが、東武鉄道の敷設により敷地が分断され、後に区画整理によって、神社は春日部駅南側の地下道横に移転し、神木としてのイチヨウだけがそのままの姿で残されたものです。このイチヨウのうち南側の1本は、松が根本で一緒になっており、地上1メートルほどのところからそれぞれ分岐し別々の枝となっています。その姿の珍しいことから、秋葉神社の夫婦松とも呼ばれて親しまれています。

この夫婦松は、形姿上、植物学上貴重であり、昭和63年7月25日春日部市指定天然記念物に指定されました。平成元年(1989)3月 春日部市教育委員会 春日部市文化財調査委員会」とある。

『何故、イチヨウと松の「夫婦銀杏松」でなく、「夫婦松」なのだろう、と思う。』、命名の言われは、不明らしい。

余談ながら、秋葉神社の総本営は静岡県浜松市天竜区春野町領家にある。ウィッキーペディアをみると、日本全国に点在する神社で、神社本庁傘下約400社、歴史地理学者・米家泰作氏による2017年(平成29年)の調査では1,129社を数える、といわれる。また、秋葉神社総本営のホームページで、由緒をみると、

「上古は『岐陸保神ノ社(キヘノホノカミノヤシロ)』と申し上げましたが、中世両部神道の影響を受けて『秋葉大権現』と称し、明治初年教部省の達で権現号を改め『秋葉神社』となりました。更に、昭和27年(1952)全国の秋葉神社の総本営であることから『秋葉山本営秋葉神社』と改称しました。(後略)」とある。

春日部市の「秋葉神社」は、江戸時代中頃に粕壁宿の名主多田家の屋敷内に秋葉権現の使いの六部が降り立った場所に祀られたとの伝承がある。須賀芳郎 著『春日部の神社』の秋葉神社の章には、祀られた伝承が記されているが、史料としての『新編武蔵風土記稿』や『武蔵国郡村誌』には、その記載はない。多田家の屋敷神社だからなのだろうか、不明である。正応2年(1289)から続く「秋葉大権現」の改称は明治元年の神仏分離令の影響だろう。権現とは仏や菩薩が衆生を救済するために仮の姿で現れること。万物流転は神仏も例外ではないようだ。続けるには時代の変化に対応できる柔軟な姿勢が大切という選択であろう。

